

書 評

中里見敬『中國小説の物語論的研究』

汲古書院 一九九六年九月

本文二二三頁 索引二六頁 中文提要 八頁

本書は、ジェラール・ジュネットに代表されるフランスの物語論的テキスト分析を中國文學に全面的に應用した野心的な試みである。題には「中國小説の」とあるが、實際には賦や史傳など一部の古典文學をも分析の對象としており、物語論的な方法の導入によって、中國文學全體に新たな視野を開こうというのが著者の最終的な意圖であろう。

著者が數ある現代歐米の文學理論の中で特に物語論を選択したのは、この理論がすでに歐米において、さまざまに最新の議論の前提ともなる古典的地位を獲得しているのに加えて、従来の中國小説、いや中國文學全體の研究が、ややもすれば作品の内容や作者の思想、経歴のみに偏り、言語あるいは廣い意味での文體への考察をおろそかにしてき

たことへの不満があつたと推察される。實際、中國語は表現形態の幅のきわめて廣い、したがって多様な文體的試みを許容できる言語であり、中國文學史とは、言語表現あるいは文體の變遷史のことであるといつても過言ではないのである。これまで特に日本の學界がこの點に十分な配慮をばらつてこなかつたと考へる評者にとって、著者の問題意識は全面的に共感できるものであり、本書の斬新さは、西歐理論の應用よりも、むしろこの點にこそあるとさえ思へるのである。

全書は、物語論の歴史と理論を要約した序章「物語論の基本原理」、その理論によって小説および賦や自傳などの古典文學作品を分析したⅠ「中國小説の物語論的研究」、Ⅰで對象となつた作品の一部である「六十家小説」について考證したⅡ「六十家小説の成立に關する研究」、中國での物語論的研究に對する批評であるⅢ「中國における物語論研究」から成る。本書については、すでに大木康氏の書評〔東方〕一九一號 一九九七年二月 東方書店)およびその一部について初出段階で書かれた鈴木陽一氏の批評「小説

研究の方法をもとめて「中里見論文を評す」(『中國古典小説研究動態』六號 一九九三年)がある。以下それらをふまえたうえで、評者なりの紹介と批評を行ないたい。

まず序章では、物語論の代表者であるジュネットの理論が、それ以前の言語學者、ソシュールとバンヴェニストの研究をふまえて生れたことが述べられる。すなわち言語の二面性にかかわる二つの理論、ソシュールのシニフィアン(記號表現)／シニフィエ(記號内容)と、バンヴェニストによるイストワール／デイスクールを掛け合わせたところに、ジュネットの物語内容(イストワール)／物語言説(レシ)／物語行爲(ナラシオン)という三分法の概念が生れたとするのである。しかしこの要約は、あまりに簡略すぎて讀者に誤解をあたえる可能性がある。特に問題なのは、イストワールという言葉が、バンヴェニストとジュネットでは別の意味に用いられていることに對する言及がないことである。

バンヴェニストにとって、イストワール／デイスクールとは、いわばテキストにおける言語表現の相違であった。

すなわち過去の出來事を語り手が明示されなかつたことで客觀的に敘述するのがイストワールであり、語り手が聞き手に語るようなかたちで述べられるのがデイスクールである。西洋の言語においては、この兩者の間に時制や指示子など明確な使いわけが見られる。これに對してジュネットのイストワールは、物語の對象となる出來事、つまり物語内容のことであり、それが語られること(物語行爲)によって、物語言説すなわちテキストになるとされる。したがつてジュネットのいうイストワールはテキストの表現形式ではない。

評者の理解によれば、そもそもジュネットの理論の特徴は、バンヴェニストがイストワールと見なしたものにも實は語り手がおり、廣い意味でのデイスクールに他ならないとする點にあつた。そのことは、本書でもたびたび引用されるジュネットの主著が『物語のデイスクール』(*Discours du récit*)という題であることに端的に示されており、その中でジュネットはバンヴェニストのイストワール／デイスクールにふれて、「イストワールは何らかのデイスクール

の部分を含まざるをえない」(花輪光・和泉涼譯「物語のデイスクール」書肆風の薈薇 一九八五 二四九頁)と述べている。日本語譯でもバンヴェニストの「イストワール／デイスクール」は、「歴史／話」と譯されており、ジュネットのイストワールが「物語内容」であるのと明確に區別されているのである。

本書で著者は、ジュネットを物語論の代表者としつつも、実際にはバンヴェニストの理論をも用いている。にもかかわらず兩者のこの重要な相違についての説明がないため、讀者に混亂をあたえているのである。本書の讀者は、評者をも含めこのような西歐の文學理論にはうとい者が大部分であることは豫想されたはずである。この點にはより行き届いた解説が望まれたであらう。

動詞の時制變化のない中國語において、デイスクール／イストワールを見分ける指標となるのは、時間などを示す指示子のみである。そこでⅠ「中國小説の物語論的研究」第一章「中國語テキストにおけるデイスクール／イストワール」では、「六十家小説」(ふつう「清平山堂話本」と言

われるもの)の二つの作品を例に、地の文とセリフでの時問指示子が分析される。この場合のデイスクール／イストワールは、言うまでもなくバンヴェニストの概念である。

ここで述べられていることは要するに、セリフでは「昨日／今日／明日」となるのが、地の文では「前日／當日／次日」となること、そしてセリフはデイスクールで、地の文はイストワールだということである。セリフの「今日」が地の文で「その日」となる(その日、「今日はよい天気だ」と彼は言った)、これはいわば當り前のことである。問題はそれをデイスクール／イストワールとあえて言い換えることによつてどんな新しい発見があるのかであらう。

問題の焦點は、セリフの「今日」が地の文で「その日」となるという當り前のことが、中國語では實は當り前ではないところにある。つまり「昨日」と「明日」は、セリフと地の文の双方に現われるのであって、「昨日」は「きのう」であると同時に「前日」であり、「明日」は「あした」であると同時に「翌日」にもなるという、西洋の言語ではありえない現象が中國語には見られるのである。

著者は、物語論の中國小説への運用が、西洋の文學理論のたんなる皮相な移入ではなく、一般理論へのフィードバックになるよう心がけたと冒頭で述べているが、このような中國語に特殊な例の分析こそはその絶好のチャンスである。著者の答はこうである。

まず「明日」については、「史記」などではイストワール(翌日)であつたのが、現代語ではイスクール(あした)に意味が變化しており、白話小説には兩者の性質が反映している、と説明される。しかしこれでは、「明日」に二つの意味があるのは歴史的に二つの意味があつたからだと云つてゐるにすぎず、答になつてゐない。「明日」以外にも「旦日」「來日」など、中國語には通時的、共時的にこの二つの意味を兼ねる場合が少なくない。「旦日」について、著者は「イストワール/イスクールに非關與的」と述べるが、これも説明したことにはならないであろう。ここでは「明日」などにはたして二つの意味があるのか、それとも一つの語で二つの状況に對應できるのか、まず吟味されねばならない。地の文/セリフという自明の言葉

をわざわざイストワール/イスクールと言ひ換えたのなら、それを手がかりに、ジュネットのいうイストワールに潜むイスクールのもの、あるいは時制變化のない中國語での兩者の區別の曖昧さなど、分析を深めることは可能であつたと思える。

次に「昨日」については、『史記』から現代語まで一貫してイスクール(きのう)であり、それがイストワール(前の日)になるのは、「白話小説の書面語としての未熟に由來する」と述べられる。しかし自分の理論に合わないからといって、相手を未熟と決め付けるのはどうであろうか。およそ理論というものは、たとえ對象が未熟であつても、そこに潜在する構造を分析してみせてこそはじめて理論といえよう。成熟した對象は分析できるが、未熟なものではできないということは、理論が未熟だということに他ならない。まして著者は、後の章で、魯迅の作品「社戲」の中で「昨夜」がイストワールにおいて用いられた例を擧げて、「作中人物が物語内容の世界から直接語りかけているような効果がみられる」と分析してゐるのである(七二頁)。

魯迅の小説では「効果」であり、白話小説では「未熟」であるのだろうか。では白話小説よりさらに早い次の例などはどうであろう。敦煌の「王昭君變文」に以下の箇所がある。

從昨夜已來、明妃漸困、應爲異物、多不成人。

—中略—

昭君昨夜子時亡、突厥今朝發使忙。

—中略—

單于是日親臨哭、萬里飛書奏漢王。

〔敦煌變文集〕一〇三—一〇四頁

「昨夜・今朝」は、著者のいう對比的用法がイストワールに用いられる例であるが、その「今朝」が「是日」に言い換えられる状況は、魯迅の小説について著者が指摘する時間軸の轉換と、少なくとも表面的には似ているであろう。第二章「話本小説における物語行爲」では、まず「六十六家小説」を例に、「物語内容に關連するディスクール」と「物語行爲に關連するディスクール」が検討される。前者はいわゆる語り手の介入であり、たとえば主人公が「こうしたばかりに、しかじかの結果をむかえた」という「端緒

の提示」がそれに當たる。著者はこれをジュネットによって「前置的」と言い換えているが、むしろ「先說法」の一種とすべきであろう。「前置的」とは、ジュネットの定義では、語りの時點から見て未來のことが語られることであるが、この場合、結末は明らかに語りの時點より過去に屬しており、たんに結末が先回りして語られるにすぎないからである。

次に後者について、「去這東京汴梁城」（この東京汴梁城にて）のような場合、「這」という指示子によって、物語内容の地點と物語行爲の地點が一致することが指摘される。實はこの點については鈴木陽一氏の「這是單に歴史化した事實を物語行爲の空間に提示するだけの機能である」との批判がある。しかし著者はこの批判に言及はしていないが、「這に文脈指示的用法（そこ）と直示的用法（ここ）があるうえ、用例が少ない」（一七頁）として答を留保している。著者がこれらを直示的用法であると斷定する最大の理由は、これらの地名がみな物語の冒頭にあつて、文脈指示的用法とは見なせないという點にある。しかしこの場合の「這」

を「(あのみながよく知っている) 東京汴梁城」というような非明示的な文脈指示と取ることは、なお可能であろう。白話小説ではないが、『董西廂』の物語開始部分は、「此本話説、唐時這箇書生」となっており、この場合の「這箇」は鈴木氏のように解釋するしかないように思える。

これにつづく部分、特に『豆棚閑話』の枠物語的構造についての分析は、鈴木氏もすでに認めたようにきわめて精彩に富み、示唆的である。ここでは一つだけ問題を提起しておきたい。著者は、話本や擬話本など説話人の口吻で語られた物語は、

語り手が【物語内容】を語る

という圖式であるのに對して、『豆棚閑話』などの枠物語は、

第一次語り手が【第二次語り手が【物語内容】を語る】を語る

ところに特色がある、とする。つまり著者によれば、説話人は物語の外部にいたのである。しかし話本や擬話本では、しばしば「説話的」云々などの語り手の介入によって、

語り手と聞き手がテキストの内部に設定されていることは、周知の事實であろう。そのような場合、これを、

テキスト外の語り手(作者)が【テキスト内の語り手(説話人)が【物語内容】をテキスト内の聞き手に語る】を語る

と圖式化することが可能であろう。この點はジュネットの理論をどう理解するかにもよるが、いずれにせよ話本の本質にかかわる問題であると思える。もし評者のような理解が可能であれば、それは『豆棚閑話』などの枠物語だけでなく、語り手、聞き手がテキスト内部にいる賦などとも共通點が見出され、また異質物語、等質物語の違いはあるにせよ魯迅などの近代小説とも一脈通じることになり、議論の廣まりが期待できるのではないだろうか。

第三章「魯迅『傷逝』に至る回想形式の軌跡」は、これまで内容や作者の思想、経歴などから解釋されてきた魯迅の小説に、物語論による語り手の視點を導入することによって新たな見方を示したもので、著者の本領が發揮された部分と言えよう。しかしここでも一つ氣になる點がある。

それは著者が分析に際して、「獨白」と「自由間接話法」という概念を用いていることである。「自由間接話法」についてジュネットは、『物語のディスクール』の中で、それをジョイスなどの「直接的言説」（通常は「内的獨白」とよばれるが、ジュネットは適切でないとする）と比較して、「自由間接話法」では「語り手が作中人物の言説を引き受ける」のに對して、「直接的言説」では「作中人物の方が語り手に取って代わる」と述べている（二〇二—二〇三頁）。すなわちジュネットによれば、「自由間接話法」と「直接的言説」（内的獨白）は別のものである。ところが著者は、右のジュネットの説明にはまったく言及せず、魯迅の作品では「作中人物が語り手を代行する」としたうえで、「自由間接話法」についてはウェイルズの説を引用する。「作中人物が語り手を代行する」のは、ジュネットによれば「直接的言説」であるから、著者の説明はジュネットの説と異なることになるが、著者はさらにシユタンツェルの「語り手の作中人物化」を紹介しており、議論が混乱している。いずれにせよここで著者がなぜジュネットの説に言

及していないのか、不可解である。

ジュネットの『物語のディスクール』は、「序」および「順序」「持續」「頻度」「敘法」「態」の各章からなるが、この書についての著者の引用は、實はⅢ「中國における物語論研究」を除いて、「序」と語り手の問題をあつかう「態」の部分に集中しており、他の章への言及は一つもない。そしてⅢの陳平原『中國小説敘事模式的轉變』を批判した個所で、著者は陳氏がジュネットの「時間」（順序、持續、頻度）と「敘法」のみをあつかう「態」に言及しないのを不満とし、「ジュネット理論の基本の把握をおろそかにすると、個々の概念の物語全體に占める位置が不明になり、ばらばらな分析に終始する」と注意を喚起している。しかし著者のように「態」の部分のみに執着するのは、それがジュネットの理論の精髓であるにせよ、やはり分析を偏つたものにしていないか危惧されるのである。「時間」や「敘法」の概念をも導入していれば、本書の分析はより豊かなものとなつたであろう。

なお著者がここで「自由間接話法」という言葉を用いる

ことにも問題がないではない。著者が「自由間接話法」とよぶのは、

「人力車がひっくり返ったのではないだろうか。電車にひかれたのではないだろうか」という作中人物の想念が、「私はそのとき……と思った」のような傳達部（先行詞）に導かれることなく、つまり語り手による媒介を経ることなく、いきなり現れている（七七頁）

ような場合である。しかしこれは、（私はそのとき……と思った）のように間接話法とも考えられるが、また（私はそのとき「……」と思った）のように直接話法とも解しうる。つまり時制變化のない中國語では（この場合は日本語も）、主語が一人稱の時、もとの文が間接話法なのか直接話法なのかを決めることはできないのであって、「自由間接話法」という用語は適切ではないであろう。時制變化のはっきりしている西洋の言語ではこのような曖昧さは起りえない。この點を無視して「自由間接話法」という概念を無批判に導入したのは、これが中國語から一般理論へのフィードバックの好材料であったと思えるだけに、残念

である。

第四章「中國文學における物語行爲の諸相」は、賦と自傳について物語論を應用したもので、魯迅の小説の場合と同じく、従來の方法では見えなかつた側面をあらたに開示した點で貴重である。賦について、語り手の審級を手がかりにあらたな分類に成功した點は大きな貢獻であり、自傳についての著者の分析には、本書の約半年前に刊行された川合康三氏の『中國の自傳文學』を補いうる議論が見られる。また「史傳」の傳統と「詩騷」の傳統という巨視的な捉え方は、著者の問題意識が中國文學史全般におよんでいることを示すものであろう。ただここでも著者は、語り手の問題のみに議論を限定しているため、賦における韻文と散文など表現形式の相違にまで論がおよんでいないのは残念である。唯一、自撰墓誌銘の誌と銘の性格の違いを論じた部分は、表現形式に關連している。將來このような方法は、たとえば詩における語り手の問題や説唱文學における韻文と散文の關係など、さまざまな分野に應用されることが望まれるであらう。

Ⅱ「六十家小説の成立に關する研究」で述べられているのは、まず第一に、明代の『寶文堂書目』に收められた話本類は、従來一部の研究者が主張したような宋元話本自体ではなく、明代に清平山堂が刊行したものであること、第二に、清平山堂が刊行したのはいわゆる「六十家小説」であつて、それは『寶文堂書目』や熊龍峯刊の小説四種、『三言』さらに『也是園書目』などからほぼ完全に復元できること、第三に、話本小説と白話文が成立したのは宋代ではありえないということである。

第一の點についてはおそらく異論はないであらう。第二の點は、假説としては成立すると思えるが、その考證の過程にはなお不備が目立つ。まず「六十家小説」という名稱は、『西湖遊覽志』にのみ見えるのだが、實は明代嘉靖年間のその原刊本にはこの言葉はないのであり、清代の光緒刊本ではじめて現れる。そしてそのもとづくところは、おそらく康熙年間の増補本の序文にみえる「西湖六十家小説」であつた（この點は大塚秀高氏のご教示による）。ところが著者はこの重大な事實にまったくふれていないのである。

すくなくとも原刊本に「六十家小説」が見えないことは、標點本とその校記を見ればすぐ分かつたはずであらう。

またこれに關連する「六家小説」の語は、顧修『彙刻書目初編』に見えるが、今度は「六十家小説」とは逆に、その原刊本には見え、後の増補本ではかえつて消えている。

この點は、事實のみ注記されているが、もう少し詳しい言及が必要であつたろう。いづれにせよ「六十家小説」が明代の資料に見えない以上、この名稱は留保をつけて用いるのが現段階では適當である。

しかも「六十家小説」についての著者の言い分を認めるとしても、それは「六十家小説」が明代のものだということであり、宋元代に話本がなかつたということ（それ自体を否定しているのではない）とは、少なくとも論理的には別の問題である。にもかかわらず第三の點では、それが一般化されいきなり前提となつており、論理の飛躍を感じさせる。著者も述べるように、清平山堂刊行とされる小説の中には、明らかに版式の異なるもの、それ以前の版本の存在を豫想させるものがあり、また形式的言語的にも白話小説

だけではなく文言や説唱系統のものも含まれ多様な形態をしめしている（白亞仁「新見《六十家小説》佚文」「文獻」七十五期に紹介されているのも文言である）。同じ結論にたどりつくにしても、これらの點を視野に入れたうえで、この問題はもう少しじっくりと論じてほしかった。

なお第一、第二の點における一連の考證を著者が「目錄學的研究」と稱するのは適切でない。目錄學は書物の分類とその背景にある文化の體系を研究する學問であり、著者の方法は書誌的研究とでも呼ぶべきものである。たとえば『寶文堂書目』で話本が著録された「子雜類」とはいかなる概念か、というのが目錄學的研究であろう。この點あえて苦言を呈するのは、中國學の基礎ともいふべき目錄學、書誌學に對する關心と知識が若い世代の研究者の間で急速に衰えていると感ずるからに他ならない。

そもそもこの「六十家小説」に關する研究は、本書の主題である物語論とは直接の關係がないのであり、そのことは「中國小説の物語論的研究」が本書の題名そのものである點に端的にあらわれている。「六十家小説」について

は、本書とは別途に詳しく議論してほしかったという感想は、おそらく評者だけのものではないであろう。

最後にもうひとつだけ不満を述べたい。本書では、呂叔湘の論文の引用など一部の例外をのぞいて、中國語の原文に翻譯がほとんどついていない。特に議論の根據となるべき作品の引用の譯がないため、中國語の分からない讀者にはその趣旨が理解できないようになっていいる。著者は、本書の研究が、中國小説の分析を通じて一般理論へのフィードバックをもはかるものだとして述べている以上、本書がヨーロッパ文學の研究者をも含むより廣い層の讀者によって検討されることを望んでいるはずであるが、これではその目的は達せられないであろう。この書評は當初、評者と文學理論の専門家が共同でおこなう計畫であつたが、それが實現しなかつたのは、おもにこの點に原因がある。著者だけでなく、今後このような研究をめざす者は、是非他分野の讀者にも理解されるよう配慮してほしい。

以上、批判ばかりに終始した感もあるが、實のところ評者は、本書によって物語論の理論に觸れ得たことを著者に

感謝している。物語論の導入は、中國文學のあらゆる分野において間違いなくあらたな地平を切り開く契機となるであろう。そのことは著者自身がもつとも深く理解しているはずである。本書は若い著者にとっては研究の出発点である。著者が今後たゆまず研鑽の歩みを進めることによって、やがて來るべきあらたなる地平への最初の到達者となることを念願してやまない。

(京都大學 金 文京)